

日中若手研究者フォーラム（中国・北京師範大学）に関する報告（参加レポート集）

2009年9月18日 関西学院大学大学院社会学研究科 大学院 GP 事務室

■ 1. 目的とスケジュール ■

以下のスケジュールで、北京において学术交流フォーラムおよび共同調査を実施した。

○ 目的：

北京師範大学（以下 BNU）民俗学国家重点学科と関西学院大学大学院社会学研究科（以下 KG）大学院 GP プログラムによる学生交流および共同調査の実施が、本フォーラムの主たる目的である。

具体的には、第 1 の目的は、前回に引き続き、ワークショップおよび研究報告会を通じた学术交流である。ワークショップ「フィールドワークの技法」では、両機関の学生が、日本／中国、社会学／民俗学において、フィールドワークはどのように位置づけられ、展開されてきたのかについて報告し、議論することを目的とした。これとは別に、前回同様、個別の研究報告もおこなった。

第 2 の目的は、ワークショップでの報告と議論をベースに実施された北京 798 芸術区における共同調査である。広告、景観、商業という三つの視点から、同地区の歴史や現状を探りながら、「共同調査」、「東アジアにおけるフィールドワーク」のあり方、意義、課題を模索した。

○ 人員（KG メンバー）：

松村淳、傲登、稲津秀樹、崔海仙、林梅、荒木康代（研究員・院生）、高坂健次教授、古川彰教授、島村恭則教授、中川千草（GP 事務室）、

○ スケジュール：

＝8月16日(日)＝

- ・ CA928 便にて関西国際空港から北京へ移動。
- ・ 宿泊：北京師範大学内、励耕学苑

＝8月17日(月)＝

- ・ 9:00～9:40 開会式 北京師範大学文学院・主楼 700A
- ・ 9:40～18:00 ワークショップ「フィールドワークの技法」

＝8月18日(火)＝

- ・ 9:00～18:00 ワークショップ「フィールドワークの技法」および研究報告会

＝8月20日(水)＝

- ・ 市内散策

＝8月21日(木)～24日(日)

- ・ 798 芸術区共同調査

＝8月25日(月)＝

- ・調査報告会

＝8月26日(火)＝

- ・CN161 便にて北京から関西空港へ。

■ 2. ワークショップ「フィールドワークの技法」および研究報告会について ■

第1回フォーラムでは研究の手法や関心の違いがあきらかとなり、参加者から、その過程で中国の民俗学と日本の社会学というそれぞれの学問的背景を共有する場をまずは設けた方がよいという意見が寄せられた。そこで今回のワークショップでは、まず、それぞれの学術史を紹介することが念頭に置かれた。そして、共同調査の手法であるフィールドワークをもとに学術史を組み立てること、さらにそこに個々の経験を加え報告することが目指された。

このワークショップとは別に、個別の研究を発表する「研究報告会」も開いた。ここにおいても、フィールドワークを意識した内容が多く、前半のワークショップと連動するかたちで実施された。

また、今回は、英語による発表が試みられた。英文での原稿作りは、和文では曖昧なまま見過ごされていた表現をあらためて見直す機会ともなった。ワークショップ「フィールドワークの技法」および研究報告会における各自の報告タイトルは次の通りである。

稲津秀樹

“Relationship between Researchers and Informants in the Research of Ethnic Minorities”

Fanhang MENG

“Personal Experience and Cooperation in Fieldwork”

林 梅

“Fieldwork Research of ‘untold stories’: A Case Study of a Village in the Northeast China”

崔 海仙

“The Dilemma in Selecting Data: Interviews toward Korean Ethnic Minorities”

Chao TANG、Jinbi CAI、Chuanlong BI、Lingxi LI

“Traditional Handicraft Workshops and Urban Social History in Beijing: Fieldwork Study on the Papermaking, Woodworking, Enamel and Carved Lacquer”

荒木康代

“The Research Method of Life History Using Interviews and Diaries”

Changcui LIU

”Fieldwork Concerning Traditional Handicraftsman and Social Context”

松村 淳

“The Role of Open Space in Redevelopment Projects: the Case of the Hanshin Mikage Railway Station Area”

Wenxian WU

“Historic Monuments and Folk Songs: Fieldwork Study on the Road-Blocking Songs of the Kam”

傲 登

“The Lives of Pastoralists: the Use of Fuel”

Fengli SHAO

“Lineage and the Construction of Modern Social Relationships in Cities and Countries: Based on Wang Family Kinship Website”



写真1 ワークショップの様子

【松村 淳 (M1)】

今回のワークショップは私にとって初めての公的な場における発表であった。しかも場所は海外、そして通訳をつけての発表という全てが初めてという中で行われるイベントである。大学院に入ってようやく四ヶ月余りがたち、まだ自分の研究対象すらおぼろげにしか決まっていない状態での参加はいささか無謀なのではないかというのが正直な感想であった。

当日発表予定の題材は大学院の授業で使ったものを元にして、公での発表に耐えられるように修正を加えたものを用いることにした。それに伴い追加のデータを集めるために何度か現場に足を運んだ。それでも所詮は付け焼刃の印象は拭い去れない代物である。GP 事務室の皆さんに英語のチェックを受ける際に、英語の表現以外にも色々と示唆にとんだ参考意見を聞かせていただいた。建築学からの視点が染み付いてしまっている自分にとっては当たり前と思うような言説も社会学、民俗学の視点からだと奇異に思われる事もある。その事実は指摘していただいて初めて分かるもので、英語表現のチェック以上に自分にとっては有意義であった。

当日の私の発表内容は、阪神淡路大震災後の駅前の再開発について、特に神戸市の阪神御影地区に焦点を絞っての発表であった。震災後に各自治体は街の顔になる駅前の再開発に大いに力を入れている。民俗学と社会学がベースのワークショップなので建築に話が偏らないように注意しながらも、建

築学や都市工学のエッセンスも入れつつ自分の研究を紹介することも忘れなかった。通訳してくれた林さんとの息も合い、無事に自身の発表を終えることが出来た。その後の質疑応答では「広場」や「公共空間」における突っ込んだ質問が寄せられた。日本においては寺社の境内が広場の役割を果たしていたという私の説明に対して、神聖な空間が一般庶民に開かれているというのが大変に興味深いという感想を頂いた。今回の発表では寺社の境内の空間構成に少し触れているもの、問題の中心ではないこともあり、あまり意識的に考えることはなかった。しかし、BNU 側の学生の質問により、そのことを掘り下げて考察することの重要性を認識することができた。

独りよがりになりがちな研究内容を誰かにプレゼンテーションするということの重要性を身を持って理解すると同時に、日本語が自由に使えない空間でそれをするという大変さも実感できたワークショップであった。

【傲登 (M2)】

今回のフォーラムでは前回に続き、問題関心の違いがあきらかとなった。社会学では主に社会問題に関心を持っているのに対して、民俗学では（特に北京師範大学側の報告、少数民族の風習、道具、そして、漢民族の「宗祖」などでは）、おもに伝統手工芸文化の伝承が中国の政治変化とグローバル化によってどう影響され、どう発展しているかについて重点がおかれていた。

前回のフォーラムに比べてよかった点は、内容は違うとはいえ、テーマをある程度合わせたことである。例えば、関学側にライフヒストリーについての発表があるということで、師範大学側からも中国の伝統手工業の現場におけるライフヒストリー調査に関する発表が用意された。テーマや手法を近づけることによって、経験や問題を共有することができ、交流し易くなったと思う。発表終了後のディスカッションも、盛り上がり、より深い議論ができた。また、今回の発表ではほとんどの参加者が英語を使って発表をし、国際交流という意識が深まったということも、前回からレベルアップした点を言えるだろう。

今回のフォーラムは全体を通して、プログラムそのものの目的である「東アジアのフィールドワークの技法と理論」に近づいた内容であった。

【稲津秀樹 (D2)】

今回のワークショップでは、前回も感じられた、社会学／民俗学という背景知、そしてそれらを養った日本／中国という土壌に由来する立場性の違いは勿論のことだが、特に以下に述べる 2 点が重要な点として明らかになった。

第 1 は、議論を通じて、双方にとっての「フィールドワーク」を発展させていく兆しを確認できた点である。

BNU 共同研究班への質疑応答から、中国民俗学の背景として、20 世紀初期の歴史的な文献史料をもとにした研究が存在していた点があきらかとなった。彼らの話によれば、上流階級のみを歴史を扱った史料研究への反省が、今の中国民俗学の基盤となっているという。1) 現存する歴史史料への過度な信用を行わないことと、2) 史料には記されない民衆レベルの民俗を把握するためにフィールドワークという手法が用いられるようになったことが分かった。こうした背景を持つ BNU 民俗学の主張に対して、「フィールドワーク」そのものを中心的な手法としつつも、「エスノグラフィー」(「文化を書

く」こと)への人類学的・社会学的反省を出発点に議論を展開する、KG側のフィールドワーク論との折り合いのつけどころが前回のワークショップでは、大きな課題となった。しかし、前回では、その反省は、KG側もBNU側の文献研究に学ぶべきとの「気づき」の次元にとどまっており、両者間で生産的な議論には結びつかなかったと記憶している。

だが、今回のワークショップでは、「日記」分析と「ライフヒストリー」法を組み合わせた調査に関する報告に象徴的だったように、KG側からBNU側の興味関心を刺激する報告も行われ、日本と中国の史料保存に関する傾向の違いや、史料と口述データの照合/異同を巡る問題が質疑を通じて議論することができた。また、BNU側からも、フィールドワークを文献研究の補助的な意味で行うのではなく、フィールド調査を内在的に、調査者/被調査者の関係を問い、更には両者の「共同」の可能性を模索するような報告が行われた。この報告のなかでは、「フィールドワーク」における“artistry”(芸術性)が主張された。“artistry”(芸術性)、あるいは感性的な次元は、社会的/法的な次元とも異なる、調査者/被調査者間の「共同」を模索する点で、興味深い。拙稿では、日本社会学における「伊田貝—中野」論争との比較、あるいは、民族調査に関わる調査者・被調査者間でみられる互いの「越境性」(transnational nature)という提起を報告したが、それらを鑑みた場合、“artistry”(芸術性)に関する見解は、たいへん示唆的であった。

第2点目として、ワークショップにおけるプレゼンテーションの形式が、深みのある議論へと至らせない遠因となったことも指摘しておきたい。

前回とは異なり、今回は、日本語/中国語以外にも、英語を用いた報告が推奨された。この試みは、(GPプログラムの柱の1つである)院生の国際発信力の涵養という意味でも、あるいは、通訳者への負担軽減というプログラム運営上の便宜においても、KG・BNU双方にとって非常に有益だったと思われる。また、個人的にも国際学会報告へ向けた絶好の機会を頂けたと感謝している。

だが、英語のみでの報告では(言い換えると、日本語・中国語の通訳を省略することによって)、報告の細かな内容が伝わらず、質疑応答時に基本的な事項からいちいち尋ねなおさなければならなくなった。(自戒を込めて言うならば)英語能力の未熟さ故に、報告内でプレゼンターが述べた事項を、オウム返しに尋ねなおす機会が、KG・BNU双方に何度もみられた。ただし、基本的な質問事項を尋ねることそのものは無駄ではない。筆者がプレゼンのなかで用いた「Transnational nature」という語は、日本語での「越境性」という表記をPPTに表示しなかった故に、BNU側に(おそらくは「二重国籍」のように)、調査外在的に存在する客観的な条件を持つような意味で誤解されてしまった。しかし、これに関する質問が集中し、なぜ伝わらないのかと思案したことにより、英語を用いることの困難性に気づくことができた。

上記の2点を踏まえて、今回重要であると感じたことは、以下のことである。すなわち、同じテーマについての両者が、フィールドワーク論を巡る異同や共同の可能性や困難をただ単純に確認しあった、という安易な「まとめ」には決して至らないことを、参加者が身をもって体験したこと。そして、双方の言語や文脈の違いに起因する、双方にとっての「誤読」(あるいは、議論に対する解釈が、それぞれ異なる文脈へ接続された「再解釈」)の可能性が常に潜んでいることである。

今回、双方の議論がこうした誤読(再解釈)可能性に常に開かれていることを自覚しつつ、異なる国家・ディシプリンに属す若手研究者同士の、共同研究を進めていくことの面白さと困難を体感することができた点が最大の収穫であると思われる。ただ、この点に関しては、前回にもまして、両者の

間を調整することに奮闘してくれた、通訳の 4 名（山本氏、林氏、崔氏、傲登氏）に、多大な負担がかかったことは間違いない。ワークショップを振り返るにあたり、最後に、通訳をしてくださった彼女たちに、再度、心からの感謝を申し上げたい。

【林梅（研究員）】

今回の「フィールドワークの方法と理論」に関するワークショップは、大変有意義な学術交流であった。前回 3 月のフォーラムが各自の研究報告に終わったことに対して、今回は、フィールドワークの方法と理論をベースとし、それぞれの研究関心対象からフィールドワークを問い直すことにより、若手研究者フォーラムの本来の目的に一步近づけた。しかも、このワークショップで議論された内容は、後半に行った共同調査における調査方法にも相互理解を深める前提となった。

また、前回は中国語と日本語で発表したが、今回、BNU は 8 名中 3 名、KG は 6 名中 2 名が英語での発表に挑戦したという点も評価できるだろう。

個々の発表にもとづくワークショップではあったが、チームワークの大切さを感じた。というのも、自分以外の報告者に向けられた質問に対する返答へ助言したり、通訳時にお互いに助け合ったりすることによって、ワークショップは充実化が図れたからである。私自身このようなメンバーと一緒に国際交流に参加できたことを幸いに思う。いい経験を積むことができた。

私の今回の発表は、日本のフィールドワークの理論と方法を中国のフィールド（農村）に応用するという内容だったので、BNU 側からは多くの質問がよせられた。現場の事実について確認の質問が多かったと思う。同じ中国であっても、調査地が異なるフィールドワーカーからは、「能力ある女性主任がなぜ昇進しない」、「上級機関が有能な人である場合昇進させるのではないか」といった意見が出た。これは、予期しない質問であり、私自身、このような問題の重要性を認識してこなかった。中国で報告することにより、異なる問題意識が得られたと同時に、異なる地域の問題点をうかがう機会にもなった。

大変収穫のあるワークショップであったが、今後における課題も出てきた。英語による発表に挑戦したことはよかったが、全体的に英語でのコミュニケーション能力が十分とはいえないので、聞き取りに困難が生じた。これを予測し、事前にお互いの発表原稿の確認をしていたので何とか議論がまとまったように思える。しかし、この事前の原稿確認なしでは、討論会の議論（翻訳）は難航しただろう。今後は、国際学会での発表などを視野に入れ、やはり一層の英語力のアップが必要となるだろう。

【荒木康代（研究員）】

今回のワークショップにおいて、発表とディスカッションはきわめて活発に行われた。特に調査者と被調査者の関係については、BNU、KG いずれの報告でも様々な観点から提起された論点であった。BNU 側から報告された調査者・被調査者の関係における協力や承認、さらには調査における感性や心性への注目は、言葉は違うものの KG 側からの報告にも共通する点があったように思う。その一方で、調査者と被調査者の「共同」に対するとらえ方の差も見られた。

各報告者の事例からも触発される点が多々あった。特に、筆者と同じくライフヒストリーインタビューを用いた伝統的手工芸者の調査に関する報告は、政治的経済的变化が家業経営に大きく作用し個人のライフヒストリーに大きな影響を与えたという点で筆者の調査事例と共通する点があった。同時

に、それぞれの社会文化的背景やその後のライフヒストリーの違いなど、比較文化的視点からもきわめて興味深いものであった。

また、筆者はライフヒストリーにおける聞き取りおよび日記分析について自身の事例を紹介しながら発表した。日記分析という手法は中国ではあまり行われていないとのことで興味を持たれ、多くの質問を得た。BNU の文献調査では、調査対象が公的な文献に限られており、この点で日記という私的な文書に対するアプローチとは手法がかなり異なっていることを感じた。

本ワークショップでは、多くの興味深い報告とともに、それぞれの調査手法についても多くの質問が飛び交い、きわめて活発な議論が展開でき、実りあるワークショップであった。

■ 3. 「798 芸術区」における共同調査および調査報告会 ■

フォーラムの後半には、両機関の参加者による共同調査が実際された。対象は、北京大山子地区に位置する「798 芸術区」である。中国内外から多くの観光客が訪れる観光スポットであり、現代アートの拠点である 798 芸術区は、もともと工場跡地だった。産業遺産、アート空間、観光地といったさまざまな顔を持つ 798 芸術区において、「広告」、「商業」、「景観」という三つの観点から共同調査をおこなった。

両機関のメンバーのほとんどが、国際共同調査の経験がなく、手探りのなかで実施された。ワークショップにおいてそれぞれの研究背景やアプローチ方法を理解したものの、実際に現場に足を運ぶと、両者のあいだの「違い」に戸惑いを覚えることも少なくなかった。意見を伝えるというシンプルな行為すら易しくはなく、どのようにしたら意見を伝えることができるのか、お互いの主張のズレはどこから生じているのか、ということ議論するために相当の時間が費やされた。しかし、手法から成果のまとめ方に至るまで議論を重ね、妥協と主張のバランスをとりながら、調査を進めることにより、「共同調査とはいかなるものか」という問いを具体的なレベルで体験することができた。特に、議論が煮詰まり、話の着地点が見えなくなりつつも、目の前の課題を放棄せず、もう一度組み立てなおすという実践を日々繰り返すうちに、あらためて「共同」の意味が問われ、自分たちにとっての共同調査のあり方を構築していったという点は、参加者それぞれにフィールドワーク経験を一層深めたといえるだろう。

わずか 3 日ではあるが、それぞれの班がテーマを絞り効率よく調査を進めたことにより、成果報告会では予想以上に充実した内容が報告された。また、各班の報告内容と自分自身の関心や班のテーマとの接点が多く見出され、質疑応答を通して更なるテーマやアプローチ方法が提示されていった。

以下、参加メンバーそれぞれの視点から今回の共同調査を振り返っておく。

* 調査の内容そのものの記録は、別途まとめることとする。



写真2 調査地となった北京 798 芸術区

【傲登 (M2)】

KGの参加者は通常、個人的にフィールドワーク調査を行っているので、「共同」調査の経験が少ないといえる。一方、BNU側は共同調査経験が豊富である。調査地が北京ということもあり、BNUメンバーを中心に調査計画が立てられた。初日は、各自の関心、テーマを探すために798芸術区を見回った。その結果、景観、商業、広告という三つの大テーマが導き出された。私は、商業をテーマとしたグループに入り、調査を行った。初日に見回った結果から、特徴のある商店3つを選択し、それぞれに対して調査を行うことにした。調査中にも随時ミーティングを行い、各自調査で得た情報を交換し合い、次の調査計画を立てていった。

今回の共同調査を通して、同じフィールドワークと言っても、アプローチ方法が違うということが分かった。たとえば、中国・民俗学では、調査するときは一先ず調査項目を立てて、仮説を立てることを大切にしていることがわかった。インタビュー内容や手段は、社会学と大差ない。BNUの参加者は、買い物客と店長との言葉のやり取り、商品が売れるか売れないかの場面などを時間かけて観察し、調査される側の経歴、店舗地図、空間配置、周辺のネットワークに関心を持った。

最終調査発表会では、三つのグループがそれぞれの調査データを持ちより発表したことによって、798芸術区についての理解が一層深まった。共同調査で得られた経験は、今後の自分自身の調査にも役に立つだろう。最後に今回のフォーラムに参加する機会を与えてくださったことに関して感謝すると同時に今後もこのような勉強のチャンスがあることを期待している。

【松村 淳 (M1)】

798芸術区に関する日本語の資料があまりなかったこともあり、調査地に対する予習は正直あまりできなかった。BNUの学生の多くも専門外の場所であり、初日は大まかな概要を掴むためにざっくりと街を歩き写真を撮ったり、ギャラリーを体感したりした。

私は自分の研究関心とも合致しているので、迷わずに「景観」を研究テーマとして選択した。798 芸術区は元々が工場地帯であり、その工場は 20 世紀の初めにドイツで起こった新しい建築・デザインの運動とその実践の場であるバウハウスの影響を大いに受けた建築様式を持つという説明を受け一層関心を深めた。自分自身の修士論文のテーマとも大いに関係するので、これは願ってもない僥倖である。

しかし、今回の目的はあくまでも日中の共同調査であり、自分の関心よりもコラボレーションという実践が重視される。ゆえに建築景観の調査も今回は無理かもしれないと思っていたのだが、幸いにも三つに分割されたグループのひとつに建築景観の調査が割り当てられ、運よくそこに入ることができた。グループは美大出身でフィールドワークの責任者の孟氏、と劉氏、通訳として関学側から崔氏、そして私の四名という最小限の組み合わせであった。

結果としてこの人数の少なさが、意見の集約を容易にし、機動力を高める結果になった。午前中に当日行うフィールドワークの方向性を確認し、大いに議論をした。我々は 798 芸術区における建築空間を五つの類型に分けて調査をすることにした。五つの類型とは、

1. 工場の建築をほぼそのまま使用し、最小限度のリノベーションしかしていない。
2. 元の様式を生かしながら、適宜手を加える方法。
3. ギャラリーとカフェを併設し、ギャラリー部分が多いに改造するが、カフェ部分に工場の痕跡を残している。
4. 原形がわからないほど徹底的に改装している。
5. 建物を改修するのではなく、新築する。

というものである。これらの類型にあてはまるそれぞれの場所を調査し、写真を撮り、関係者にインタビューをした。私は建築のフィールドワークの手法として用いるスケッチによる「記録」を行った。コンベックスを用いての建物の実測はおそらく許可されそうにないので、次回以降の課題とした。

最終日の発表のための資料作りは分業によって行われた。私が建築の類型に関する発表のための原稿作り、孟氏が全体の統括と中国語のパワーポイントの制作、劉氏が英語版のパワーポイントの制作、そして崔氏が中国語の原稿の邦訳という分担である。結果として、調査成果のボリュームがやや薄くなってしまったが、代わって、日中の学生による共同調査の手法とその意義、そしてその実践の成果報告が厚くなった。つまり、BNU のメンバーにとっては、798 芸術区における景観調査というのは手段であって目的ではなく、あくまでも日中の学生のコラボレーションが重視されるものであった。この点について、KG 側の参加者は調査中に十分理解できていたわけではなかった。

しかしながら、私にとっては 798 芸術区、そして建築景観の調査という自分の興味対象そのものをリサーチできたということは、幸運であった。そして民俗学の手法を修めた学生のリサーチ方法を間近で学べるという貴重な機会にも接することができたことに関しては大いに感謝したい。

798 芸術区は建築学、民俗学、政治学、社会学、あるいは現代アートシーンという様々な視点から掘り下げてみる価値のある大変に興味深い場所である。今後もできれば継続調査をして修士論文やその他の成果として発表できればと考えている。



写真 2 798 芸術区内の建築物

【稲津秀樹 (D2)】

前回では、BNU・KG 側それぞれの研究報告が中心であり、民俗学／社会学との間の差異が大きく際立つ印象であった。だが、それはあくまでも研究報告を通じた印象であって、肝心の前門地域のフィールドワークでは、皆で同じ場所を数か所めぐってはみたものの、そこを BNU 側のメンバーがどのようにとらえているのか、あるいは BNU 側からすれば、KG 側がどのようにみているのか、ということの意見の相違をよく確かめないうままに、まち歩きは終了してしまった感があった。つまり、両者の差異がフィールドという現場で如何に食い違いを生じさせるのか、といった類の問題については、前回訪問時の段階では、いわば、両者の未体験ゾーンだったのである。

今回のフィールドワーク／報告では、まさにその、フィールドという現場において、両者の対象へのアプローチの違いが、学問的のみならず調査の形式的な面において明確になった。とくに、調査日程の後半から筆者が所属することとなった「広告班」においては、そうしたズレが頻発することとなった。この班は、「両機関のメンバーからなる混合チームを組む」という BNU による調査方針にもとづき、調査中盤で急遽編成されたものであった（だが結成後には、現地で別行動をとることを、実際に彼ら自身で推奨してしまうようになっていた）。すでに別テーマで調査を進めていた筆者を含む他の KG メンバーにとっては、実に急な変更であった。

しかしながら、問題は上のような形式面にとどまるものであって、学問的には、わずかな時間でも現地での行動や意見交換を行うことによって、次のことが得られたと思っている。それは、BNU 側の民俗学のスタイルと KG 側の社会学のスタイルは、互いの調査上の欠点を相補う側面を持っているということである。例えば、広告班においては、BNU 側からは 798 芸術区にある店舗の広告を全て調査し、それらを細かにリストアップし、統計化することにより、店舗同士のネットワークを把握していく方向性が提出された。1 日目は、まずその作業を全員で行った。その上で、2 日目に KG メンバーは、幸いにも 798 芸術区の「ビエンナーレ」を指揮する雑誌編集部へのインタビューを行った。この内容をふまえて、3 日目には、店舗で集まる細かなデータのみならず、インタビュー結果を活かし、798 芸術区の場を作らしめている大きな社会背景について考えていく必要性を提案することができた。この段階に

なってはじめて、こちらの話に対して、BNU のメンバーも積極的に耳を傾けてくれるようになった。

このとき、筆者は、これらの対象へのアプローチの違いは、互いの欠点を補い合うものとして理解した。すなわち、BNU 民俗学のアプローチおよび対象の特徴は、細かなモノのデータをトコトン収集するところにある。この方法は、モノを通じてミクロに人間をみていくことにその特徴があるが、今回のように少人数かつ短期間で調査成果をあげなければならない時には、全数調査はそもそも不可能であるため、限界が生じる。そういった際に、社会学的アプローチの特徴である、代表性を有する対象への調査を通じた、「一点突破」的な手法は、今回のような短期的な調査には大きな強みを発揮することになる。

だが、言わずもがな、こういった手法の弱点は、中心とその周辺との関係が把握できなくなってしまう点である。広告班であれば、対外的／国際的なイベントである「ビエンナーレ」の広告の分析と広告業務を取り仕切る雑誌社へのインタビューを通じて、ある程度は 798 の「今」をみる事が可能であると思われるが、逆にいえば、798 に現在流通する広告は、その広告だけにとどまるものでもない。こういった社会学が抱え込まざるを得ない欠点を、BNU 側のメンバーが得てきてくれた知見が補ってくれた。地道な聞き取りを行った彼らが発見した内容自体、個人的にたいへん興味深いものであった。

最後の共同報告で出された結論は、調査期間の都合上、どの班も初歩的な知見にとどまらざるを得なかったように思えるが、どの班の議論にも、今後の調査にむけた「おもしろさ」が内包されていたように感じられた。だが、この場合の「おもしろさ」とは、いったい何であろう。これについて、筆者は、社会学者がよくいうところのおもしろさとは若干異なる印象を持っている。つまり、あの時感じた「おもしろさ」とは、BNU 民俗学と KG 社会学の手法を重ね合わせていくことで、調査地の「図」と「地」をバランスよく把握していくことができるのではないかと、というある種の手ごたえに基づく、「おもしろさ」であったように思えるのだ。今後の 798 芸術区フィールドワークがどのような形で展開していくにしろ、第 3 回目の学术交流にむけた課題として、この民俗学・社会学の協業を行うことによって生まれる「おもしろさ」をどのように言語化することができるのか／できないのか、といった諸点が、東アジアのフィールドワーク論を練り上げていく上での課題としてあげられるだろう。



写真3 インタビューにて

【林梅 (研究員)】

今回のフィールドワークは、20日に基礎調査を行い、その後、商店、景観、広告の三つのグループに分かれ、実施された。ほとんどの調査者が初めて経験する国際共同調査であるが、役割分担、調査方法、調査対象の選択などで基本的に協力が得られ、成果があった。その成果が最終日の報告会に反映された。商店グループは経営者の個人史に焦点をあて、景観グループは景観における歴史性の保存に注目するなど、それぞれの始点やアプローチが報告された。調査過程、調査内容、今後の課題の報告内容はそれぞれ多様性が認められた。今後、継続的に調査する声もあがった。

私が参加した広告グループは、まず広告(看板や店頭にかかるチラシ)の収集を行った。次に、収集した広告に関するデータベースを作り、どのような店にどのようなチラシが置かれているのか、など傾向を把握するとともに、いくつかの書店とギャラリーをピックアップし、インタビューを行った。また、798芸術区内で開催されているイベント「ビエンナーレ」の広告に注目し、主催者である雑誌編集部に対するインタビューを行った。このように異なるルートで、798芸術区にアプローチすることで、短時間の調査で調査報告をある程度充実させることができた。

KG側とBNU側では関心や手法が異なるため、同じ班のなかでも最終的に発表する案を考えるときには、妥協と主張のバランスをとる必要があった。広告グループの一員であり、通訳を担当した立場からみると、視点と方法が異なるメンバーによる共同調査は、その「統合」がもっと大変な作業であった。だからこそ共同調査とは何か、どうあるべきかなど問題は十分に議論する必要があると思う。今後の共同調査においても、重要な課題であるだろう。また、まとまりの良さをめざすと、かえって個性と多様性をなくすこととなり、そのバランスをいかにとるかということも課題として残された。

【荒木康代 (研究員)】

共同調査では、景観調査班、広告調査班、商店調査班の3つに分かれて、798芸術地区の調査を行った。798地区は、国営工場の建築物をそのまま利用した芸術地区であるが、現在では、新しい観光スポットとなっている。報告者は、商店班を担当し、師範大側4名関学側2名で調査を行った。商店調査では、最初に798地区全体と商店地区を全員で見回った後、手分けして各商店に対して簡単なヒアリングを行った。この結果、地区内の商店を3類型に分類できることがわかった。すなわち、①自らのオリジナル手工芸品のみを取り扱う店②自らのオリジナル製品と一般仕入れ商品の両方を扱う店③自ら商品を作ることはなくすべて仕入商品のみ店の3つである。その後、各類型から3つの商店にしぼって、各商店2人で集中した聞き取りを行うことにした。

3商店に対するインタビューは、3日間連続して行った。調査方法については、商店近隣の店舗構成、店舗内の商品構成、さらに店主に対するライフストーリーインタビューなど、調査手法を共有した。また、インタビューにあたっては、聞き取りの項目を共有することによって、3つの商店の事例を比較検討することができるようにした。もっとも、このような調査手法の共有は、事前に決めてから調査を行ったことによるのではない。むしろ、調査中やその後の話し合いの中で、積極的にお互いの調査方法を伝えることによって、共有されていった面が大きかったように思う。このような調査によって、3店の特徴が明らかになったとともに、798地区の商店の共通性やそこに見られる社会経済的背景も探ることができた。

今回の共同調査は、報告者にとって海外の研究者との初めての共同調査であった。調査はきわめて

短時間のものではあったものの、調査手法において共通する点、異なる点それぞれを生かすことによって、意義のある調査結果を得ることができた。また、前回 3 月のフォーラムで築いた信頼関係によって、今回の円滑な共同調査ときわめて活発な議論による交流が可能になったと考える。

以上。